

或るは指の爪甲を以ちて、仏の像を画作らば、みな仏の道を成らむ。また一の手を挙げ、小し頭を低れ、此れを以ちて仏の像を供養せば、上無き道を成らむ」とのたまふ。是を以ちて慎みて言へ。

沙門功を積み仏の像を作り命終る時に臨みて異しき表

を示す縁 第二十

一 老僧觀規は、俗姓二間名干岐なり。紀伊國名草郡の人なり。自性天年

三 雕巧を宗とす。有智の得業にして、並に衆の才を統べたり。俗に著きて管農をして妻子を蓄養ふ。先祖の造れる寺、名草郡能応村に有り。名けて弥勒寺と曰ふ。字を能応寺と曰ふ。觀規、聖武天皇の代に、願を發して釈迦の丈六と並に脇士とを雕造る。白壁天皇の世の宝龜十年己未に、造り奉ると既に畢り、能応寺の金堂に居きて、會を設けて供養す。また願を發して十一面觀音菩薩の木像を雕造る。高十尺ばかりなり。半を造りていまだ畢へず。緣少くして年を歴、老耄いて力弱くして、自づから彫ること得ず。爰に老僧年八十有余歳の時に、長岡宮に宇大八嶋國御めたまひし山部天皇の代の延暦

元年癸亥の春二月の十一日に、能応寺に臥して命終る。二日を遶て更遶還りて、弟子明規を召して言はく「我れ一の語を忘る。念ひ忍ぶること得ず。故に還來るなり」といひて、すなはち床を立て階を敷き食を備けしむ。是に檀目武蔵村主多利丸を請へ、床に居食を饗して、対面ひて共に食ふ。食ふと既に畢る。すなはち坐より起ちて、明規と並に諸の親屬とを引率て、長跪きて多利丸を礼みて言はく「觀規分少くして命尽く。觀音の像を畢へずして忽率に罷る。今幸に暮き時に逢ふ。益して思ふ所を申さむ。伏して願はくは、尊の芳き慈を蒙りて聖の像を畢へむと欲ふ。寸心の願、僅に望む所に当れば、故に後生の大なる福は觀規に被り、現報の功德は尊主に蒙らむ。至誠に勝へず、また参り還來りて、礼無き状を奉りて、悚慄り謹みて白す」といふ。爰に多利磨と明規と等、悲び哭き涕淚して、答へて曰はく「既に語れる状を請く。我れかならず畢へ奉らむ」といふ。沙門聞きて、起ちて排み歡喜ふ。また二日を遶て、同じき月の十五日に至りて、明規を召して言はく「今日は仏の般涅槃したまひし日に當る。余れまた命終らむ」といふ。明規答げむとおもひて、父の慈ふる儀を見、愛の至に勝へずして、許りて言して白さく「いまだ彼の日に及ばず」とまうす。師磨を乞ひて見て言はく「今十五日に當る。何すれぞ我が

けず、左膝は立てる。臂部は浮かして踵より離されたであらう。「含蓋脚蹠」大目乾連冥開救母經文)。

二 釈迦の般涅槃の姿は面西西方(大般涅槃經緣分上)とされるが、壞た姿勢であつて、本説話の「向西」は、極樂浄土への往生をめざすことであらわすか。法苑珠林兜率篇・弥勒經に所を述べて於晨朝時「甲楊枝淨口、散華燒香、仏像前胡跪合掌、口誦七遍、若三七遍、滅四重五逆等罪、現身不為諸橫所屈、命終生無量壽國」とみえる。上卷二十二縁。三 午後三時から五時のころ。日没の前。日没と極樂浄土とのイメージの結びつきは、善導の觀經疏・定善義にみえる。釈迦の般涅槃の時刻は大般涅槃經緣分上によれば「中夜」。

四 内密菩薩儀、外現声聞形(二)中卷七縁、百弟子受記品。五 上卷二十二縁。本説話も上卷二十二縁も極樂浄土への往生説話を考へられる。ことさらに戒が言及される。結婚していたが戒を破つていない、という弁解的記述。

第三十縁 公教的なものかまうなく含まれていない説話。

六 未婚の女性として高僧。九 在胎期間の長期にわたることを示すことによつて、胎内の子が不思議な力を有することを示している。三七八年。ただし、延暦五年は壬戌。癸亥は延暦二年。下巻三十縁。二 いわゆる鏡石伝(本紀・十一引所引紫風土記、十一引所引前國風土記)に登場する石は二幅。書紀・垂仁天皇二年冬にみえる教忍

